

〔特集：地域が誇る農の逸品2022〕

育成品種をモデルチェンジ！7・8・9月需要期に出荷できる小ギク 「常陸シリーズ」5品種の育成

郷内 武

茨城県農業総合センター 生物工学研究所 果樹・花き育種研究室

1. はじめに

茨城県のギク生産は、特に小ギクの割合が高く、県内のギク類切り花出荷量の約70%を占める。出荷量は2,140万本で全国第3位であり、沖縄県、奈良県に次ぐ小ギクの産地である（2019年）。生産は7月の東京盆、8月の旧盆、9月の彼岸の物日需要向けが主体であり、東京都中央卸売市場の小ギク出荷量のうち、6月から10月にかけては茨城県産が約41%とトップシェアを占める（2018年）。

生産現場では、6月から10月にかけての長期出荷に対応するために多くの品種が栽培されており、赤色は約140種、黄色は約150種、白色は約130種が出荷されている。1生産者当たりの保有品種数は、多い生産者では70品種を超え、管理の繁雑化が問題となっている。そのため、今後優良品種の導入と不良品種の淘汰による品種の絞り込みが課題である。

当研究所では、2002年から物日出荷に適する県オリジナル品種の育成に取り組み、2011年までに「常陸シリーズ」9品種を育成した。変わりゆく生産者ニーズや気象に対応するため、過去にリリースした品種の再点検と育種目標の再設定を継続的に行い、より優れた

品種の育成に取り組んでいる。本稿では2015～2019年にかけて新たに育成した5品種について紹介する。

2. 育成経過と品種特性

当研究所の小ギク育種規模は、一次選抜（1年目実生）供試数が約6,500～1万個体／年、二次選抜以降（特性検定）供試数が約80～130個体／年である。育成は、品種間および自然交雑により獲得した集団について、おもに7、8、9月の物日向け開花への適用性、切り花品質、フラワーフォーメーション（草姿）、白さび病耐病性などの項目による選抜で実施している。

所内および現地における栽培試験、流通関係者による評価など（後述）を経て、2015年に7月向け「常陸サニーバニラ」（白）、8月向け「常陸サマールージュ」（赤）、「常陸サマーシルキー」（白）、2018年に8月向け「常陸サマーライト」（黄）、2019年に9月向け「常陸オータムゆうひ」（赤）がそれぞれ品種登録された（写真1、口絵参照）。さらに「常陸サマールージュ」、「常陸サマーシルキー」および「常陸サマーライト」は8月作型とともに7月作型においても高い切り花品質を確保でき、複数需要期に適応できる特性を有する。

オリジナル品種には、生産者のニーズに合致して継



写真1 小ギク「常陸シリーズ」5品種の花の様子

	6月		7月		8月		9月	
			上旬					
赤								
								
白								
								
黄								

図1 小ギク「常陸シリーズ」収穫カレンダー

統的に生産される品種もあるが、一方で栽培性や耐病性の面で弱点が明らかになったことや、近年の厳しい気象条件下において障害が発生したことなどにより普及拡大に至らなかった品種も存在する。今回育成した品種のうち3品種は、切り花品質や需要期出荷への適用性向上の面で過去の育成品種の置き換えが期待されている（図1）。

3. 小ギク流通関係者、生産者とともに選抜

小ギク育種にあたっては、過去の育成品種や既存品種の問題点を把握し、それらの改善に資することできる品種育成を目指している。生産現場における問題解決を選抜に反映させるために、毎年需要期ごとにJAグループ茨城花き流通部会（全農、県内産地JA担当者、普及員、専門技術指導員、研究員が構成員）による現地検討会を開催し、圃場にて選抜系統の評価を行っている（写真2）。この検討会では、県内主産地における現地試験成績についても検討し、栽培性や

耐病性などに関する担当生産者の意見も選抜に反映させている。このように、県内小ギク関係者が一体となり、本県オリジナル小ギク「常陸シリーズ」の育成を推進している。

4. 今後の展望

県内における「常陸シリーズ」14品種の栽培面積は合計238a（2020年）であり、現在のところ本県出荷量に占める「常陸シリーズ」の割合は約5%程度と大きくはない。しかし、引き続き流通関係者や生産者の意見を反映した品種育成を継続することにより、現場ニーズにあう品種をリリースすることにつながり、生産者の所得向上に寄与できるものと思われる。

本県小ギクのさらなる振興を図るために生産規模の拡大を視野に入れた機械化が必要である。小ギク生産の作業のうち特に大きな労働時間を占めるのが収穫・調整作業で、同じ日に定植した同じ品種であっても株ごとに開花日が数日異なるため、生産者は開花状況を観察しながら手作業で収穫することとなる。収穫の機械化のためには収穫期に一斉開花する品種の利用が有効であるが、遺伝資源および選抜集団の評価方法は未確立である。開花斉一性に影響する要因は、日長応答性と温度応答性を中心に多くの要素で構成されていると思われる。当研究室では将来の開花斉一性に優れる品種の育成に向けて、その評価法および形質に連鎖するDNAマーカーの開発を目指して研究を開始したところである。



写真2 小ギク育成系統の現地検討会

〒319-0292 茨城県笠間市安居3165-1

（ごうない たける）